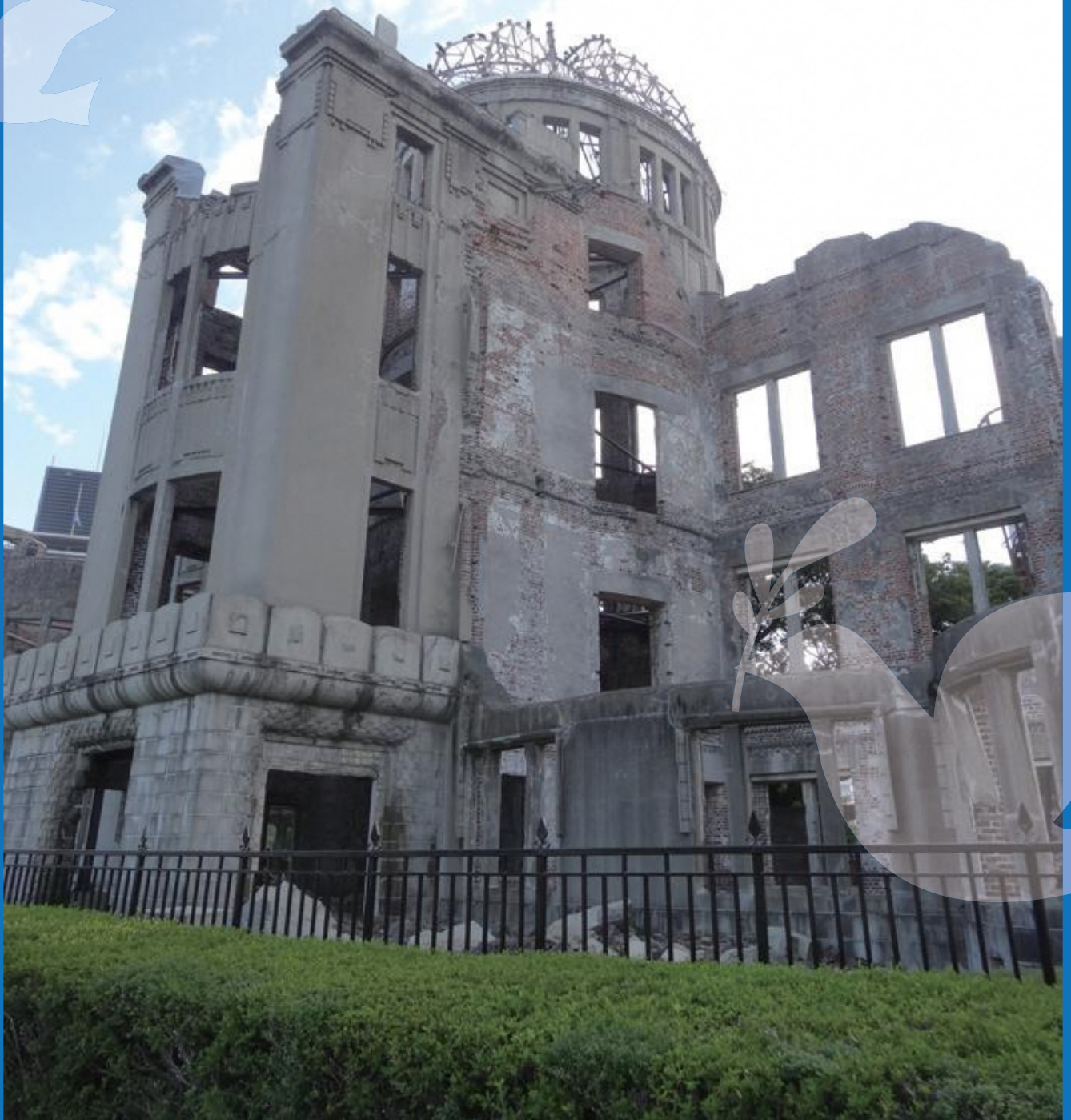


豊島区中学生 広島派遣報告書



豊島区非核都市宣言40周年記念誌
2022



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

c o n t e n t s

目次

非核都市宣言	1
区長あいさつ	2
議長あいさつ	3
教育長あいさつ	4
非核都市宣言40周年記念事業	5
中学生広島派遣事業の概要	8
参加者名簿	9
中学生報告書	10
引率者報告書	38
記録写真集	44
被ばく体験伝承者	48
広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	49

非核都市宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。しかし、核軍拡競争は激化の一途をたどっている。われわれは、人類唯一の被爆国民として、平和憲法の精神に沿って核兵器の全面禁止と軍縮の推進について積極的な役割を果たすべきである。

よって、豊島区及び豊島区民は、わが日本の国是である「非核三原則（造らず、持たず、持ちこませず）」が無視され、われわれの海や大地に核兵器が持ちこまれることを懸念し、わが豊島区の区域内にいかなる国の、いかなる核兵器も配備・貯蔵はもとより、飛来、通過することをも拒否する。

豊島区及び豊島区民は、さらに他の自治体とも協力し、核兵器完全禁止・軍縮、全世界の非武装化に向けて努力する。

右 宣言する。

1982（昭和57）年7月2日

豊島区

（原文は縦書きです。）

発刊によせて

豊島区は今年度、東京23区で初めて非核都市宣言を行ってから40周年を迎えました。ロシアによるウクライナ侵攻が続く中で、この節目の年を迎えることとなりました。

また、豊島区は、今年度、区制施行90周年を迎えました。これらの記念すべき年における平和祈念事業として中学生の皆さんの広島派遣を行いました。

日本は、世界で唯一の被爆国です。

私はこれまで「文化が平和をつくり、未来をつくる」と言い続けてまいりました。豊島区の未来を担う中学生の皆さんが被爆地である広島を訪れ、平和について考える機会を設けることは、大変意義深いものがあると考えております。

訪問された皆さんの報告書を見ると、「一瞬にしてすべてを壊しつくし、多くの命を奪った原爆の恐ろしさや、この悲劇を二度と繰り返してはならないということを深く感じた」など、実際に現地に赴いたからこそその迫力のある内容でした。ぜひ、この経験を皆さんから多くの方に伝えていただきたいと思います。

今年度はこの広島派遣のほか、「自治体SDGsモデル事業」にも選ばれた池袋駅周辺4公園を「平和のシンボル」として明確に位置づけるとともに、としま区民センターにおいて「平和祈念展 in 豊島」を開催するなど、まさに100周年への懸け橋となる平和推進事業を展開いたしました。

これをきっかけとして、戦争の悲惨さ、平和の大切さを、これまで以上にしっかりと区民の皆さんへ伝え続けていきたいと考えております。

この冊子は、非核を含めた『平和』について、皆さんと一緒に考えるために作成いたしました。より多くの皆さんにご覧いただき、平和の実現について考え、行動するための一助となることを願っております。

2023年2月

豊島区長 高野 之夫

記念誌の発刊にあたり

今年度、豊島区は、非核都市宣言40周年及び区制施行90周年の記念事業として、区立中学生の皆さんと一緒に被爆地である広島を訪れ、平和記念式典にも参列しました。

式典の後には資料館も見学し、原爆によってもたらされた悲しみ、恐怖、そして平和の尊さと非核への思いをあらためて強くいたしました。中学生の皆さんにとっても、貴重な経験となったことと思います。

本区は、東京初のSDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業認定都市として、豊島区議会の議決を経て「としまSDGs都市宣言」を行いました。

宣言では、より良い未来をこれからの世代へ引き継いでいけるよう、私たち一人ひとりが「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、行動することを掲げています。

この度の広島訪問によって、生徒の皆さん一人ひとりが胸に秘めた「尊い平和」への強い想いを、ぜひとも、皆さん一人ひとりの言葉で語り伝え、そして、明るい未来に向けて行動を起こしていただくことを心から願っています。

豊島区議会では被爆地である広島市と長崎市の平和記念式典に隔年で議員団を派遣しています。

これからも、区民の皆様とともに、核兵器廃絶と恒久平和の実現を強く祈念し、非核平和の大切さを訴え続けてまいります。

2023年2月

豊島区議会議長 木下 広

挨拶

このたび、豊島区非核都市宣言40周年記念誌の発行にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

昭和57年7月2日、豊島区は、世界の恒久平和を願い、23区で初めて「非核都市宣言」を行ないました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から昨年度まで中学生の派遣を見合わせていましたが、令和4年8月5日～6日、区立中学生14名による被ばく地である広島への派遣を再開いたしました。各中学校の代表生徒は、広島平和記念式典に区民の代表として参列し、被爆体験伝承者の方から話を聞きました。参加した中学生からは「戦争と核兵器が生むのは、必要のない犠牲と人々の悲しみだけである。核兵器がなくなる限り、本当の平和は訪れない。一刻も早く核兵器をなくさなければならない。」との感想が寄せられました。派遣された中学生一人一人が核兵器や平和について知り、考える貴重な経験となったと思います。

核兵器の悲惨さを「語り継ぐことは、平和の種を蒔くこと」です。この間、各中学校において、今回派遣された中学生による報告会が実施され、その貴重な経験を区内の中学生全員に広めていただきました。まずは、中学校に平和の種が蒔かれました。そして、本記念誌によりさらに多くの区民の方々に「平和の種」を広めることができます。

教育委員会といたしまして、今後も非核平和都市の一翼を担う者として不断の努力の大切さを考える生徒の育成に努めてまいります。

結びに、今回の中学生広島派遣事業に向け、ご協力いただきました中学校長会をはじめ各中学校関係者に深く感謝申し上げますとともに、本記念誌発行によるさらなる成果を祈念し、挨拶といたします。

2023年2月

豊島区教育委員会教育長 金子 智雄

非核都市宣言40周年記念事業

円盤を投げる平和の青年像 除幕式

令和4年7月20日、豊島区は、非核都市宣言40周年及び区制施行90周年を新たなスタートとして刻むため、画家・彫刻家の田淵隆三氏より区へ寄贈いただいた「円盤を投げる平和の青年像」を、としまみどりの防災公園（愛称：IKE・SUNPARK）に設置し、除幕式を行いました。

式典では、制作・寄贈いただいた田淵隆三氏に、高野区長より感謝状を贈呈しました。

また、これからの豊島区の未来を担う子どもたちの代表として、区立朋有小学校の児童の皆様からもメッセージをいただき、土に還る素材でできた風船を、平和への祈りを込めて空高く飛ばしました。

式次第

- ① 豊島区長挨拶
- ② 豊島区議会議長挨拶
- ③ 豊島区制施行90周年実行委員長挨拶
- ④ 除幕
- ⑤ 感謝状贈呈
- ⑥ 制作者挨拶
- ⑦ 朋有小学校生徒によるメッセージ他



円盤を投げる平和の青年像（田淵隆三氏作）



高野区長から田淵氏へ感謝状贈呈



平和の祈りをこめたバルーンリリース

4つの公園から「平和」を世界へ発信

池袋西口公園には「平和の像」、南池袋公園には「哀悼の碑」及び「被ばくアオギリ2世」、中池袋公園には「被ばくクスノキ2世」が設置されています。IKE・SUNPARKへの「円盤を投げる平和の青年像」の設置に伴い、池袋駅周辺4公園のすべてが平和を願う象徴となり、まちづくりと一体的に、平和の大切さを発信しています。

平和の像

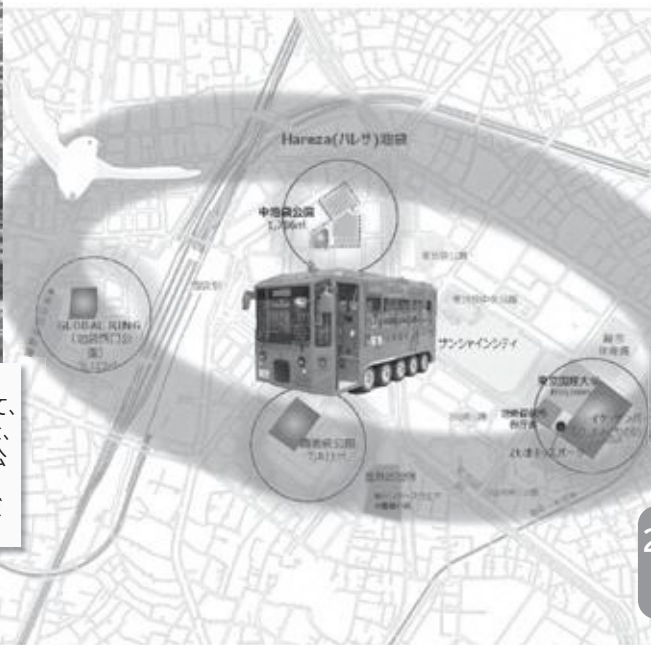


彫刻家、竹内不忘氏作。
区民が誇りつる平和のシンボルとして、ハトをテーマにした女性ブロンズ像を、平成2年8月15日に、池袋西口公園に設置。
足元には、非核都市宣言を刻んだ碑がある。

被爆クスノキ2世



長崎で被爆したクスノキの種から育てられ、平成15年4月に中池袋公園に植樹。



2022年、画家・彫刻家、
田淵隆三氏より寄贈

被爆アオギリ2世



広島で被爆したアオギリの種から育てられ、平成15年4月に南池袋公園に植樹。

哀悼の碑



戦後50年の節目にあたる平成7年8月に4・13根津山小さな追悼会実行委員会会員の声により南池袋公園に設置。「城北大空襲」の犠牲となった方々の冥福を祈る。

円盤を投げる
平和の青年像



画家・彫刻家、田淵隆三氏作・寄贈。
区制施行90周年を豊島区の新たなスタートとして刻むため、平和をひらく円盤投げの像を、令和4年7月にIKE・SUNPARKに設置。

平和祈念展 in 豊島

11月9日～14日　としま区民センター　多目的ホール、7階会議室

平和祈念展示資料館の代表的な資料や、戦争の体験をわかりやすく伝えるために描かれた紙芝居やカルタを展示しました。また、平和祈念展示資料館との合同展示として、「マンガで学ぶ戦争と平和」と題し、マンガ・アニメの原点である「トキワ荘」のあった豊島区から、戦争と平和について学べるマンガ等も展示しました。

「マンガで学ぶ戦争と平和」では、戦争で傷つきながらもしたたかに生き抜く東京の庶民を描いた『風太郎不戦日記』（勝田文・マンガ、山田風太郎・原作）を、当時の豊島区の写真を交えて紹介しました。あわせて、漫画家・ちばてつやさんが、創作活動の原点となった子ども時代の引揚体験を描いたマンガ等を展示しました。

11月12日（土）には、映画「硫黄島からの手紙」を上映しました。



中学生広島派遣事業

●目的

令和4年度は豊島区非核平和都市宣言40周年にあたる。区内中学生を被ばく地である広島に派遣することで、戦争の悲惨さ、非核平和の重要性について理解を深めてもらい、またその報告書を40周年記念誌として発行することにより、中学生だけでなく広く区民一般に非核平和についての意識をもってもらうことを目的とする。

●参加者 豊島区立中学校 各校代表生徒 14名

●実施日 令和4年8月5日(金)～6日(土) 1泊2日

●スケジュール

日程(曜日)	時刻	内容
8月5日(金)	7:30 9:21	区役所本庁舎集合・出発式 東京駅発
	13:16	広島駅着
	14:30	大和ミュージアム、てつのくじら館見学
	17:00	広島平和記念資料館、国立広島戦没者追悼 平和祈念館、原爆ドーム 視察
	19:30	夕食
8月6日(土)	6:00 6:30	朝食 ホテル発
	8:00	平和記念式典
	10:00 11:30	被ばく体験伝承者による講話 昼食
	13:42	広島駅発
	17:36	東京駅着 解散式

参加者名簿

(1) 豊島区立中学校 生徒

駒込中学校	立山 朝啓	駒込中学校	丸川 彰太郎
巣鴨北中学校	田巻 光士郎	巣鴨北中学校	新宮 夏芽
西巣鴨中学校	武田 いろは	西巣鴨中学校	吉村 芽依香
池袋中学校	大西 柚葵	池袋中学校	森川 夏音
西池袋中学校	菊池 凜音	千登世橋中学校	篠原 なつめ
千登世橋中学校	谷田部 章	千川中学校	菅野 幹大
千川中学校	中谷 克太郎	明豊中学校	飯田 裕大

(2) 引率者

千川中学校長	永野 祥夫	千川中学校主幹教諭	小池 恭平
千川中学校主任養護教諭	阿久津 萌	教育委員会統括指導主事	菱田 行記

(3) 区長・区議会議員団

副区長	高際 みゆき		
豊島区議会議長	木下 広	豊島区議会副議長	永野 裕子
豊島区議会議員	ふま ミチ	豊島区議会議員	中澤 まさゆき
豊島区議会議員	芳賀 竜朗	豊島区議会議員	塚田 ひさこ

(4) 事務局

総務部長	兒玉 辰哉	区議会事務局長	高田 秀和
総務部総務課職員	山本 未来		

中学生広島派遣事業に参加して

豊島区立駒込中学校 2年 立山 朝啓

1. はじめに

私は、争いが嫌いです。

2. 戦争の残酷さ

今回の見学で呉市の大和ミュージアムに行きました。ここでは日本が時間の経過とともに劣勢に代わっていく過程で戦争に対する考えが変わっていく様子を感じました。特にそう思ったのは、戦争の末期に人間魚雷の回天を開発したことです。戦艦大和を作るほどの技術があったにもかかわらず、最終的に人の命を武器にするような愚かな行為をしたり、国民に劣勢の状況をさとられないように情報操作するなどしたりしてしまったのです。

戦争の恐ろしいところは追い詰められればどんどん正しく考えたり行動できなくなってしまうところだと思います。

3. 原爆の恐怖

2で記述したことは最悪な結果として原爆投下につながってしまいました。原爆ドーム、広島平和記念資料館を見学しましたが、原爆ドームは鉄骨の曲がるような熱や屋根が吹き飛ぶような爆風の威力を私たちに伝えてくれました。特に広島平和資料館では被爆した直後の人々の写真や持ち物、そして人々の体験談が展示されており、この場所に来なくては分からない生きた話があり、原爆の恐ろしさを伝えようとする被爆者の思いが伝わりました。

4. 戦争のない世界を目指して

戦争で日本は原爆を落とされ結果として敗戦しましたが、原爆だけを本当に戦争の被害の実態として語るべきではありません。原爆は多くの人々を苦しめましたが、例えば日本の戦死者数の合計は310万人にも及び、東京大空襲では11万人近くが亡くなりました。戦争による多くの悲惨な行為によって本当に多くの大切な命が奪われていきました。原爆での死傷者数とはとても多く悲惨なものですが、戦争の悲惨さは数で比べられるものではなく、大切な人の命が奪われたという事実はどの地域においても同じです。今私が言いたいのは原爆が戦争のすべてではないということです。原爆を落とされた唯一の国として語り継いでいくことは大切です。それでも、何世代も経つと原爆の恐ろしさを知らない人が増え、形だけの恐ろしさになっていき原爆を意識しなくなっていくと思います。そうするとまた原爆が使用される危険性も高まります。原爆の本当の怖さというものをしっかりと伝え、そして、戦争に関するその他の事実も同



等に伝えなくてははいけないと思います。どこか他の国で戦争が起きても、「原爆が落ちていないのだから」と関心をもたなくなってしまうということをなくし、戦争を少しでも知り、自分のことのように気にして欲しいと考えています。

5. 最後に

私は争いが嫌いです。だからと言っておかしいと思うことを我慢して行うのはよくないと考えています。自分が嫌だと思うことを続ければどんどん都合が悪くなってしまいます。おかしいと思っていても話し合うことでお互いを理解できれば、勘違いであったり、相手がより理解したりして、お互いがより良い結果を見つけられると考えます。

おかしいと思ったときに行動できる人に私はなりたいです。

戦争は絶対に行ってはいけません。

「原爆とこれからの未来」

豊島区立駒込中学校 2年 丸川 彰太郎

1. 事業に参加するにあたって

今まで、原爆や戦争については、授業で学んだ程度にしか知りませんでした。この派遣事業には「原爆や戦争のことをより深く知りたい」、「これからの社会を担っていく立場として戦争と原爆の悲惨さ、命の尊さを改めて学ばなければならない」という思いをもって参加しました。

2. 原爆ドームを見て

原爆ドームは、私に原爆の恐怖と破壊力を教えてくれました。原爆投下前の建物と比較してみると、その威力がどれほど大きかったかが分かり、無惨に崩れた建物からは、犠牲になった方々の苦しみに似たような何かを感じました。一瞬にしてすべてを壊し尽くし、多くの命を奪った原爆の恐ろしさ、そしてこの悲劇を二度と繰り返してはならないということを深く感じました。



原爆ドーム / 個人



3. 平和記念資料館

平和記念資料館では、被爆当時の広島の様状を深く知ることができました。特に心を痛めたものは、被爆した方々の写真や絵と、同じく被爆した方々の遺物です。写真では、重い火傷を負って苦しむ男性、火葬される遺体などの様子から、被害の悲惨さと、被爆に対する恐怖を感じました。皮膚が爛れ、何もできないまま苦しむ様子は、まさに地獄と呼ぶのに相応しいと思いました。また、被爆して亡くなった方には中学生も多く、自分と同年代ということを見ると、心が痛みました。被爆した方々の遺品には、被爆の苦しさを物語る痕跡があり、写真と併せてより一層恐怖を感じました。実際の資料を見る前と見た後では、原爆への恐怖心がより現実的なものになりました。

4. 平和記念式典参加

平和記念式典では、原爆が炸裂した時間に犠牲となった方々に対して黙祷を捧げました。あの時、この瞬間に、あの惨劇が起こったと思うと自然と体が震えました。「もし、今原爆が落ちてきたとしたら？」と想像してゾッとしました。あの日の出来事は、きっと一言で済ませていいことではないと思います。でも、この時は、「怖い」の一言以外は出てきませんでした。平和宣言の後、多くの鳩が放たれました。鳩は平和の象徴として知られています。世界に一刻も早く、核兵器のない平和が訪れることを願っています。

5. 被爆体験伝承者の話を聞いて

被爆体験伝承者である橘さんの話を聞いて、原爆の悲惨さをさらに実感しました。細川浩史さんは、ビルの4階で勤めていた時に被爆し、妹は顔を残して真っ黒になってしまいました。鈴木カンゾウさんは当時少年兵で特攻訓練をしているときに、被爆地の支援に向かい、被爆しました。脱線した電車の窓からは、白骨死体がぶら下がっていたといいます。最後に橘さんは、「何があっても戦争はしてはいけない。いい戦争や悪い戦争なんてものはない」と言っていました。そのとおりだと思いました。戦争は必要のない犠牲しか生みません。この言葉を忘れないでいたいと思います。

6. 最後に

今回の派遣事業を通して、私は、戦争や原爆について、またこれからの平和について、次のように考えました。「戦争と核兵器が生むのは、必要のない犠牲と人々の悲しみだけである。核兵器がなくなる限り、本当の平和は訪れない。一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。」今回のことを、まずは自分の周りに発信し、戦争や平和について、もっと多くの人に知ってほしいと思います。

70年前のヒロシマへ

豊島区立巣鴨北中学校 2年 田巻 光士郎

1. 広島派遣に参加するまで

今回の事業が行われることを知ったとき、考える間もなく参加することを決めました。平和について学ぼうとする志をもつ友達と実際に現地に行って学べる機会は二度とないと思ったからです。参加できると決まった後は原子爆弾や広島という場所について学び、万全の状態広島派遣事業に参加できる状態にしました。

2. 被ばく体験者講話

被ばく者の体験を伝承する活動を行っている橘光生さんからお話を伺いました。

「8月6日午前8時15分、広島に原爆が投下されました。宇宙まで届くような大音響でした。爆心地にいた人たちは一瞬にして皮膚はたれ、目は取れ、人かどうかわかることさえ難しかったそうです。」私はこの話を聞いて原爆の底知れぬ恐ろしさを感じました。今の平和な時代を生きている私たちには到底想像することのできない被害だったのだと思います。また、橘さんは話すとき終始悲しそうで、それもまた原爆の恐ろしさを物語っていました。

橘さんは最後に戦争は憎しみ、悲しみしか生まれず、一人一人が心の中で平和の種を育てることなくすことができることを教えてくださいました。これからは私たち若い世代が後世に平和の種を残していかなければならないのだと実感することができました。

3. 大和ミュージアム

大和ミュージアムで戦艦大和や潜水艦、戦闘機の模型を見て驚いたのは当時の日本の技術力の高さです。あの時見たものが70年以上前に作られたものとは信じられません。しかし、戦争のために作られたものであると考えると悲しい気持ちになりました。





4. 原爆ドーム

2022年の今でも原爆ドームだけは1945年のまま時が止まっているようでした。崩れ落ちたがれきなどがある状態は、ほんの数日前に火災でもあったかのようで生々しく、リアルな姿でした。あの状態で保存しておくことは大きな意義とともに、大きな痛みも伴うのではないかと思います。取り壊してきれいにしてしまえば戦争と原爆の記憶はやがて薄れていくことでしょう。その方が楽だと感じる人もいるに違いありません。しかし、広島市と広島の人々は敢えて残す決断をしました。私たちは広島の人々の思いを風化させてはいけないのだと思います。

5. 平和記念資料館

平和記念資料館では目を疑う写真や文章の連続でした。いざ写真を見てみると被爆者の思いが僕の頭の中を駆け巡るようでした。あの時見た写真は今も脳裏に焼き付いています。どんなに辛かったのだろう、苦しかったのだろう、痛かったのだろう。考えるだけで胸が苦しくなってきました。

6. 最後に

原爆が落ちた当時、広島は、世界から「75年は草木も生えぬだろう」と言われていました。しかし、実際には数年後綺麗な花が咲き、今では広島の地は立派に復興を遂げています。それは広島の人々の懸命な努力があったからだと思います。私たちは私たちの手で平和な広島を取り戻したのです。しかし今でも世界では、戦争や紛争が行われ続けています。平和を作るのも戦争をするのも私たち自身です。

あと数年経つと被爆者はいなくなってしまうことでしょう。被爆者の方々は世界の平和の土台を作ってくださいました。次は今を生きる私たちの番です。私はこの旅を通して、世界に平和を訴える義務と責任を感じました。その責任を果たさなければすぐにでも日常は崩れ去ってしまいます。

だから、私たちは宣言しなければなりません。被爆者の方々と70年前の広島の地に感謝の想いと未来への希望を込めて。

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返させぬから。」

伝える、繋げる

豊島区立巣鴨北中学校 2年 新宮 夏芽

1. 広島派遣の参加が決まって

私はニュースで取り上げられていたウクライナとロシアの戦争の様子を見て、戦争の脅威を実感したとともに戦争とはどのようなものなのか興味をもったことをきっかけに、今回の広島平和学習への参加を希望しました。参加が決まってから原子爆弾について詳しく調べると、広島や長崎に原子爆弾が落とされてから70年以上たった今でも苦しみ続けている人たちがいるという現実を知り、平和とは何か、平和な世界を創っていくために私達にできることは何か学習したいと感じました。また、学んだことを多くの人に伝えていきたいと思いました。

2. 見学を通して

1日目、大和ミュージアムには戦艦大和の模型や特攻兵器の模型、乗組員の遺品など、戦時の様子を想像させるものがたくさん展示されていました。呉海軍工廠の技術力に驚いた一方で、当時、こんなものが戦争で使用されていたと思うと改めて戦争の恐ろしさを痛感しました。

広島平和記念資料館では、被害者の遺品や被爆者の当時の様子を描いた絵など痛ましいものばかりで目を背けたくなりました。しかし、資料一つ一つが苦しみを訴えているようにも感じられました。ボロボロになった衣服、中身がむき出しになった塀、人影が残された石など、広島の人々に当たり前にあったはずの生活を一瞬にして奪ってしまった原子爆弾の悲惨さを感じました。また、戦争は二度と繰り返してはいけないものだ改めて感じました。

原爆ドームではむき出しになった鉄骨や周辺に大量に崩れ落ちている煉瓦などを見ることができました。改めて原爆の恐ろしさを感じたとともに、原爆ドームが世界遺産に登録されている理由が分かったような気がしました。





3. 平和記念式典に参加して

2日目は平和記念式典に参加しました。式典では、広島市長による平和宣言や広島市の児童による平和への誓い、内閣総理大臣からの挨拶などが行われ、100か国以上の人達が参列していました。短い時間の中で様々な国や立場の人々が「平和」について深く考えるきっかけになったと思います。この式典を通して感じた原爆の悲惨さや平和の尊さを伝えていくことが大切だと感じました。

4. 被爆体験講話を聞いて

8月6日8時15分、人類史上初の原子爆弾が広島に投下されました。

「白い閃光とともに宇宙まで届くような大音響が鳴り、窓が割れた。空には巨大なきのご雲が見え、広島市へボートで慌てて向かうと町は変わり果ててしまっていた。焼け落ちた家、焼け焦げた幽霊のような人達、脱線した市内電車、窓にぶら下がった白骨。ある時、私は近くで助けを求めている女性を置いてその場を立ち去った。今でもあの女性はどうしたのだろう、あのとき私が助けていればと後悔して自分を責めることがある。」

この話を聞いて、私は戦争が行われていた時期に生きていなくてよかったと感じてしまいました。原爆が投下されたことで当たり前の日々が一瞬にして奪われてしまったという現実を改めて感じ、当時の状況を想像しただけでとても辛く苦しい気持ちになりました。

5. 未来へ

今回の広島平和学習を通して、私は核兵器や戦争の恐ろしさを改めて感じたとともに、平和な未来を創っていくためには一人一人が思いやりの気持ちを持ち、武力ではなく対話をして相手を理解しようとするのが大切だと学びました。この学んだことを活かして思いやりの輪を広げていき、日本の過去について学ぶことが私たちにできることであり、平和への大きな力になるのだと思います。



1. はじめに

令和4年8月5日から6日は、私の人生において忘れられない2日間となりました。私の住む豊島区から派遣していただき、77年前の同じ日に、人類史上初の原子爆弾が投下された広島で、平和記念式典に参列することができたからです。

2. 被爆四世としての私

私は、広島原爆の被爆者四世です。私の父は広島県東部の出身で、父の母方の祖母、つまり私の曾祖母は、原爆投下の直後の広島市に入り、壊滅した市街地で、救援隊としての活動をしたそうです。そのため、被爆者手帳という手帳が配布され生涯を被爆者として過ごした曾祖母は、その長寿を全うし、今は、慰霊碑の名簿に記載されています。そのため、私の祖母は被爆2世であり、父は被爆3世、そして私は被爆4世となります。父はよく、「原子爆弾はお父さんにとっても遠い昔話ではないんだよ」といっていますが、私にとっては、どうしても、どこか遠くの世界のお話のように感じることもありました。しかし、この度の広島派遣事業に参加させていただき、曾祖母が被爆した広島、父の話す広島を、少なくとも以前よりは、自分自身のこととして深く感じることができました。

3. 原爆の話が聞けない理由

父は幼い頃から時々、自分の祖母に救援隊として活動した時に見た広島での街の様子を尋ねた事があったそうです。しかし、その度に、普段はとても明るい祖母が口をつむぎ、「そりゃもうひどいもんじゃそりゃ言葉にはできん」と言って、目を伏せ、何も話してはくれなかったそうです。そのとき、私の曾祖母がどんな気持ちでいたのか、今回の広島での学びを通じて、やはりほんの少しだけですが、私にもその理由が分かったような気がしました。なぜならば、平和資料館での展示を見て、8月6日の広島朝は、言葉での表現をすることのできない、地獄の苦しみの世界だったということを感じたからです。そしてその苦しみは、多くの人にとって、その後も長く、今でも消えることなく続いていることも分かりました。



4. 語り部の方のお話

私を感じたのは、原爆が本当に投下され、爆発し、人間の暮らす日常の世界を一瞬にして地獄に変えたのだという事実の恐ろしさでした。そのことを、私たちのために言葉にして語って伝えようとしてくださっているということ自体に、まず私たちは感謝しなければならないと思いました。さらに、そのお話は、私たちのためだけでなく、私の子供やその子供や、未来の全ての人たちのためのものだということを、強く感じました。私たち一人一人が真剣に自分自身を作り上げていくことの大切さを語られていました。そのお話を通して私は、「思う」ことができれば「考える」こと、そして「行動する」ことが大事なのだと思います。「行動」と言っても、大げさなことではなく、私の毎日の勉強や食事を大切にして、人や自然に対して、いつも思いやりや感謝の気持ちをもつことが、結局は、戦争や核兵器のない世界をつくっていくことにつながるのではないかと考えました。私たちがお互いにそんな気持ちで暮らせる世界であったなら、人を苦しめるための原爆を作って投下して、さらにそれを肯定することなど、決してできるはずはないのです。美しい広島街や川を見ながら、争いごとをしても誰も幸せにはなれないこと、人を大切にすることで、人は幸せになれるということを改めて強く感じました。

5. これから

1945年に、東京も広島も長崎も、日本中の町が焼け野原になって、何十万人もの人が亡くなって戦争が終わった後、1964年には高層ビルが立ち並び、新幹線が走り、オリンピックも開かれました。私はその奇跡が、いつも信じられません。しかし核兵器もまた、ますます恐ろしいものになっています。戦争は本当には終わっていないように思います。この度の広島で学んだことをもとに、世界の平和を実現するために、自分を豊かにするために、あらゆる勉強に励む決意です。

広島派遣を終えた今の自分が考えること

豊島区立西巣鴨中学校 2年 吉村 芽依香

1. 広島派遣に参加する前に考えていたこと

学校の授業やテレビのニュースなどで度々話題となっていた広島でしたが、私は広島の被ばくについて何も知らず、一から知ることが多いため広島派遣に行く前は不安でした。ですが、広島派遣についての説明会があり、そこで広島について少し知ることができました。事前に説明された場所や、そこで何が起こったかなど、自分の目で見えることを想像したことで、少しずつ不安がなくなっていました。

2. 大和ミュージアム、てつのかじら館を見学して

大和ミュージアムでは、第二次世界大戦や日独伊三国など、当時の日本と外国の関係について学ぶことができました。私が見学した中で最も印象に残った資料は「原爆」についてです。日本で初めて原爆が投下されたのは、広島です。8月6日に爆弾が投下され、一分もたたずに次々と他の家や建物に燃え移り、見るに絶えない状況でした。当時、登校する時間でもあり、被害がとても多い姿が見られました。ひどいときは学童疎開など大変な中生活を送っていたそうです。今では考えられないほど苦しくて辛い中、生きていたと想像すると、心が痛みました。特に、誰も行くことを望んでいない戦争でたくさんの人たちの命が亡くなったと考えると二度と繰り返してはならないものだと強く感じました。

てつのかじら館では、戦争に使われた道具が、当時使っていた現物のまま展示されていました。普段見ることのできない道具を見て、戦争が本当に行われていたんだという実感がわきました。また海上自衛隊について資料がたくさんあり、普段調べることのない内容がたくさん書いてあり、新しいことをたくさん学びました。資料の中で特に印象深かったものを紹介します。

1つは機雷です。機雷は水の中にある爆発する兵器のことで、船舶接触や、音響等で爆発します。アメリカ軍が瀬戸内海に仕掛け、日本の行動を阻止するために行われました。それを取り除くために行われたのが、2つとして取り上げる掃海です。掃海は海上自衛隊の役目ですが、接触することで爆発するため、亡くなられた方も大勢いました。



<機雷>



3. 広島平和記念資料館を見学して

1日目の最後に平和記念資料館を訪れました。資料館の中には当時原爆の被害にあった人々の姿がありました。体は焼け、顔は包帯で巻いてあり、目を背けたくなりながらも必死に目に焼き付けました。資料には、幼い子供からお年寄りの方までの姿もあり、惨状を目の当たりにしました。また、ボロボロになった衣服も展示されていて、自分より幼い子どもたちが辛い中生き、そして、原爆で命を奪われてしまうことが現実で起こっていたと考えると、心が締め付けられる思いでいっぱいでした。原爆に含まれる放射線によって受けた病は、普通の治療では治らず、苦しい姿がありました。戦争や空襲を起こさないためにも、今自分が何をしたら良いかを考えさせられました。様々なかたちでたくさんの方々が生きたことを改めて感じました。

4. 被爆体験伝承者の方のお話を聞いて

今回お話をしてくださった方は橘光生さんです。お話いただいた中でも1番心に残ったのが、細川こうじさん（当時17歳）のお話です。細川さんはビルの4階で被爆し、割れたガラスが突き刺さり、血だらけになりながら避難をしたそうです。私は被爆の話一度も聞いたことがなかったので、想像を絶するほど苦しくて悲しい経験なのだと感じました。また、細川さんの妹さんも被害にあい、妹さんの顔は焼けてしまい、もとの顔が分からないほどだったそうです。ですが、細川さんだけは妹だと分かったそうです。そして「ただただ忘れたかった」と細川さんは言葉を残しました。もし私が細川さんの立場だったら妹さんの顔を見ることができなかったと思います。恐怖のなか一生懸命生きて被爆体験を話してくれたこと、私たちにこのようなことを語ってくださいました橘光生さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。

5. 感想

私は広島派遣に行き、学んだことがたくさんあります。また、当たり前前に過ごしていることを日々感謝しなければいけないことを考えるようになりました。戦争という悲惨なことは二度と起こしてはならないと改めて感じることができました。この経験を生かし、たくさんの方に伝えていきたいです。平和な国を築き上げていく裏側には辛く苦しい思いをしながら生きていた人もたくさんいるはず。次は私達が平和な世界をつくり上げなければなりません。戦争はそれぞれの考えの違いで起こってしまうものだと感じています。それを無くすことは難しいと思いますが、一人ひとりが平和について考え、戦争を無くすという意識を高めていくことが大切だと感じました。



明日を生きる

豊島区立池袋中学校 2年 大西 柚葵

私は8月5日、6日の2日間、広島に行ったことで、様々なことを学ぶことができました。今まで1度も広島に行ったことがなく、戦争についてあまり考えてこなかった人生だったので、実際に行って見てきた資料や街は想像をはるかに上回るものでした。

1. 広島平和記念資料館を訪れて

1日目の最後に訪れた広島平和記念資料館は、2日間の中でも特に印象に残っています。被害者が生前普通の日常の中で使っていたものや、被爆によって大怪我を負っている人の写真など、たくさんの原爆、被爆についてのものが展示されていました。

全身をやけどしてしまった人、顔をやけどして目が開かなくなってしまった人、何とか生き延びたけど、その後原爆症により亡くなってしまった人など、写真に写っている人々は、私が想像もしていなかったところまでの被害を受けていました。

写真だけではなく、食べる予定だったはずのご飯が、原爆により炭化してしまった弁当箱や、見たこともないくらいぐにゃっと曲がったガラス瓶、原子爆弾が投下されるまで子供が乗って遊んでいた三輪車、8時15分のまま針が止まっている時計など、普通の日常の中にあっただけのもたっただけの爆弾で黒く塗りつぶされてしまった様でした。

展示を見ていくうちに、77年前に誰もが生きたかった、生きなくてはいけなかった「明日」を、ただダラダラと過ごして、勝手に、明日があるから大丈夫だろうという期待を当たり前に行っている、そんな自分がすごく不甲斐なく感じました。

2. 広島平和記念式典で

2日目の8月6日、朝8時から、今回のメインである広島平和記念式典が始まりました。終戦から77年が経って、建築物や経済などが復興、復活しても、大切な人を失い、傷つき続けた人々の心はなかなか元に戻りません。一生かかっても心の傷が癒えなかった人だってたくさんいるはずですよ。もちろんこのことは日本だけではなく、広島に原子爆弾を落としたアメリカの人たちだって、同じ思いをしてきたのではないかと思います。

戦争は、日本もアメリカも深く傷つき、ただ明日を生きていたかった人々の希望と命を奪ってきました。結局、戦争をしても何も手に入れることはできないのだと、式典に参列している大勢の外国の方たちを見て実感しました。



3. 感想

今回の広島派遣事業で、平和の尊さを自分で見て、聞いて、感じることができました。今は世界各国がまだまだ核兵器を持っているような状況ですが、一人ひとりが77年前にあったことについて知り、考えることが大切な一歩だと分かりました。一歩ずつ進んでいって、「平和は尊いもの」という認識を超えて、「平和が当たり前」な世界になってほしいです。

平和の街 広島を訪れて

豊島区立池袋中学校 2年 森川 夏音

1. 広島派遣への志

この事業を通して学びたかったことは主に「平和とは何か」、「平和な世界を造るにはどうしたら良いのか」という2つのことだった。戦争、原爆の悲惨さを学び、この2つの答えを見つけたいという志で立候補させてもらった。

2. 被爆体験伝承者講話を受講して

お話をしてくださったのは、被爆体験伝承者である橘さんという方。橘さんは、被爆者の地獄のような体験や、橘さん自身の戦争に対する考えなどを話してくださった。その中で特に印象に残ったのは、橘さんの、平和な世を造るためには「自分が一番大事、それは良いことだが、他の誰かの“自分”も大事にできるようにする」事が大切だという言葉だ。私に“自分”があるように、すぐ側にいる他人にも“自分”がある。他人の中の自分を、私の中の自分と同じように愛すること、同じ重さで考えることが、平和な世を造るために大切な考え方だと分かった。

3. 平和記念資料館を見学して

平和記念資料館には、被爆した方の遺物や写真、原爆投下直後の様子を描いた絵などが展示されていた。他にも、大やけどを負った被爆者の背中の写真、食べられることなく焼かれた弁当箱、8時15分で止まった時計など、とても目を背けたくなるものばかりで、説明を読むたび涙が出そうになった。本当にあったことなのだと痛感した。もう二度とこのような地獄を造ってはならないと思った。この世で生きることができるだけ多くの人に、ここを訪れてほしいと思う。展示品は、被爆者や被爆者の遺族が、再び自分たちが経験した惨劇、悲しみ、苦しみを地球上の誰もが経験しないための証となってほしいという願いを込めて寄贈され続けているそうだ。平和記念資料館は、訪れた人一人ひとりが戦争について知り、平和な世のために考える事ができる、平和への架け橋となる場所だと思った。

4. 平和記念式典に参加して

式典が始まる前に、被爆者の方がお話をされている映像が流れていた。そこに映る誰もが、戦争を繰り返さないために発信をされていて、平和は祈るものではなく自ら造っていくものだと知ることができた。平和記念式典のなかで心に残ったのは、平和への誓いの「自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心もち、相手を理解しようとすることです。本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。」という言葉だった。本当にそのとおりだと思った。傲



慢さをもつのではなく寛容な心をもつこと、それこそが真の強さである。これは日常生活の中でも生きる言葉だと思う。この言葉を念頭に置き、“本当の強さ”をもつ人間になれるよう努力していこうと思った。

5. 広島で生きる人のあたたかさに触れて

式典に参加する日の朝、ホテルで私がエレベーターに乗る際、70代くらいのご夫婦と一緒にエレベーターに乗ってきた。その時、男性の方に「式典に参加するために来たの？」と聞かれたので、そうですと答えた。するとその男性が、「じゃあ、ようこそだね」と言って下さった。私はその時、すごく心が温まり、ほっとした。てっきり私は、広島の方々は、色々な場所から大勢が式典に参加することを少し迷惑に思っているのではと思っていた。他の人に聞いた話で、ある学生が式典会場に笑って話をしながら入ってきたことがあり、「何のために来たんだ」と思ったのだそうだ。私はそのような責任感に欠けた行動を取るような人が参加することもあるのだと知り驚いた。そんなことがざらにあるのなら、広島に住む参加者は当然、広島に来てほしくないと思われ、嫌悪感をもつのだろう、そう思っていた。だがこの男性の「ようこそ」という言葉で私の予想は覆された。広島に住む人々全てがこのご夫婦のような人だとは言えないと思うが、この平和の街広島に住む人は、この世の平和を造っていく広く大きな温かさをもっていたのだ。私は感動した。平和の門や祈りの泉など、人の想いでできたものの集まるこの広島は、平和の街であるとともに、人々の温かい想いでできた“あいのまち”（愛、逢、合）でもあると知ることができた。

6. 広島派遣事業を終えて

今回学びたかった2つの問題について自分なりに見つけた答えを書く。「平和とは何か」という問題についての答えは、私は「この世のすべての人が平等で幸せな世界」だと思った。戦争はいきものを殺し、街を破壊し、生き残った人間の心と体をも蝕むものであり、このような酷いものが存在する世界に平和は永久に訪れないということを痛感した。では、「平和を造るためにはどうしたら良いのか」。その答えは、私は「一人ひとりが本当の強さをもち支え合う」だと思った。今回の事業で私は、平和とは、平和への誓いで言っていた“本当の強さ”をもち、一人ひとりの行動から造っていけるものだを知った。平和は単に戦争がないことではない。貧困やいじめや差別などもなく平等であることだ。だからまずは本当の強さをもつ努力をする。違う考えを認めて理解する努力をする。人の気持ちを考えて自分なりに優しく接する。自分なりにできることはたくさんある。平和がいつかおとずれますようにと祈るのでなく自分の行動から変えていく。優しくされた人は、きっとその優しさを他の誰かに届けたくなるだろう。私には直接戦争を止める力も、傲慢な人間を止める力もない。でも本当の強さで生まれた優しさはきっと、直ぐ側にいる人に繋がりをまたその隣りにいる人に繋がりがどんどん広がっていくだろう。だから私は、優しさを沢山の人の手に届けて世界に優しさの輪が繋がるように、思いやりのある行動を周りにいる人にたくさん、たくさんしていこうと思う。

「ヒロシマ」を「理解」する

豊島区立西池袋中学校 2年 菊池 凜音

1. 広島派遣事業に参加するにあたって

インターネットや教科書などに並べられた「ヒロシマ」の文字。それは何を表すのか、私はまだ知りませんでした。その意味を知るために、体感するためにこの事業に臨みました。

2. 「妹の制服」

私には一人の妹がいます。小学六年生。私にとって妹とは単なる「家族」という言葉では言い表せないほど大切なものです。そして広島に着いてからより、そう思うようになりました。

平和記念資料館で見学が始まって少し経つと涙がポロポロ、ポロポロ落ちてきました。目の前には「妹の制服」と題した、きっと純白だったであろう、焼けこげた制服があったのです。寄贈された制服のそばにこんな言葉が添えられていました。

「これを見てすぐに妹のだとわかった」

この言葉を見てさらに涙が溢れ出てきました。自分より先に幼い妹を亡くしてしまうことは想像するだけで胸をしめつけるものです。それは妹のいる私だから分かることです。しかも、ついさっきまで確かに存在していた、あいさつや会話を交わしていたのに、たった数秒の出来事が今の自分を、未来の人生を、こんなにもガラリと変えてしまう恐怖、いや絶望を初めて目の当たりにした瞬間でした。そして展示を見終わって思ったことがあります。

“生きていてよかった。自分が生きていてよかった。家族が生きていてよかった。友達が生きていてよかった。生まれてきてよかった。”

と。

あの日におきたことを完全に知ることは不可能です。しかし、少しでも事実に触れることで今、私たちが生きている「あたりまえ」の世界に感謝し、また「あたりまえ」の世界に住んでいる人々の尊さが分かると思います。それは私がこの事業に携わって体感したことのひとつです。

3. 被爆体験伝承者の講話を聞いて

被爆体験伝承者とは被爆者の体験を聞き、被爆者の代わりに被爆体験を伝える人のことです。その方自身は被爆者ではないのですが、やはり人の口から伝えられる一つ一つの事が生々しく伝わり、より心に響くものでした。まだ私たちと同じくらいの歳の人、もしくは私より小さい子供が原爆によって亡くなったり、その後の放射能の影響で亡くなったり・苦しんだり。また、無事だったとしても独りで「生かされてしまった」り。一つの核が多く命を犠牲にしました。

そして、私には心に残った言葉があります。



「ただ“知った”だけでは“理解した”ことにはならない」

この言葉は被爆体験伝承者の方が講話を始める前に私たちに向けて放った言葉です。今まで”知る“ことが一番大切だと思っていた私を変えてくれた言葉です。知ることと理解することはこれまで同じだと思っていたからです。

知って、自分なりにその事実を解釈し、他人に伝える。これこそが真の理解だと思います。「理解するとは何か」が被爆体験伝承者の方の講話を通して考えることができました。

4. 最後に

私は冒頭にも書いたように77年前の8月6日に広島に何があったのかを体感するために参加しました。式典の参加や展示の見学を通して原爆の恐怖や戦争のある世の中について深く考えることができたし、当時の人々がどれだけ大変な思いだったかを体感できました。それは逆に平和について考えることでした。今の世の中は決して平和とは言い難い状況にあります。ですが、こんな中学生にもできることがあるんじゃないでしょうか。それが理解することです。相手への理解を深めることが平和への第一歩だと思います。理解をしようとしなければ、関係が悪化させる。本来、理解することは一番大切で難しいことです。それでも一人ひとりが理解しようとする必要があります。

ヒロシマを知ることは平和を考えること。

平和を考えることはじぶんを見直すこと。

広島派遣事業に参加して、さまざまな体験と発見を得ることができました。私が得たものを誰かにあげることが私の使命です。その使命を果たせるように努力していきたいです。

このような機会を用意していただきありがとうございました。

平和についての答えなどない

豊島区立千登世橋中学校 2年 篠原 なつめ

1. 参加前に考えていたこと

私は以前から「戦争」というものに関心をもっていた。なぜなら私の祖父や祖母がよく戦争について話をしてくれていたからだ。そして、今回学校代表として広島に行くことが決まった。「平和とは何なのかを考える」という課題を自分の中につくり、広島へ向かった。

2. 資料館を見学して

1日目に平和記念資料館に行った。資料館には原爆を体験した人たちのエピソードが、被爆したとき身につけていたものと一緒に展示されていた。私が今まで原爆というものに抱いていた感情は「怖い」というもの。しかし、展示を見て原爆は怖いと感じるだけでは済まされないのだと思った。

正直、資料館には見るのがつらくなるような展示がたくさんあった。それでも目を背けずに見学し、カメラにも収めた。なぜなら、展示から「見てほしい」という気持ちが伝わってくるような気がしたからだ。この残酷な歴史が繰り返されないように、多くの人々の心に展示が訴えかけているように感じた。





3. 被爆体験伝承者の話

2日目は被爆体験伝承者からお話を聞いた。被爆体験伝承者とは被爆者からお話を聞き、それをたくさんの人に伝える方のことだ。原爆が投下される前のアメリカとの話し合いについて最初に聞いた。どうして広島が犠牲にならなければならなかったのかなど、私が知らなかった貴重なお話を聞くことができた。また投下後の様子はテレビで語られる広島原爆の話よりも生々しく恐ろしかった。被爆した方の「人間らしく生きることも人間らしく死ぬこともできない」という言葉が私の心に深く刺さった。先ほど書いたように私は原爆をただ怖いと感じていたが、人間らしく生きることも死ぬこともできないなんて本当に怖いだけでは済まされないとあらためて思った。

4. 学んだこと

今回広島で資料館を訪ね、また被爆体験伝承者の話を聞き、原爆についてより深く理解することができた。私は広島に行くにあたって「平和とは何なのかを考える」という課題をつくった。しかし、被爆体験伝承者の方はこう言った。『平和についての答えなどない。答えがないものに葛藤することで人格をつくる。挑戦し続けて』この言葉を一生忘れることはないだろう。これからは答えのないものに葛藤しながら生きていく。そして挑戦し続けよう。



広島派遣事業に参加して

豊島区立千登世橋中学校 2年 谷田部 章

1. 広島派遣事業に応募した理由

低学年のころに出された課題でヒロシマ、ナガサキに関することを調べていく中で徐々に興味がわいてきて戦争の悲惨さや原爆についてもっと知りたく、実物を見たいと思い、応募しました。

2. 大和ミュージアム・てつのくじら館

10分の1スケールの巨大な模型、零戦、元現役の潜水艦などの体で感じられる展示物で、当時の日本の技術に驚かされました。

当時の物や解説により呉という街が軍港により発展し、戦後も平和産業港湾都市として発展してきたということが知れたのが大きな収穫でした。



3. 平和記念資料館

最近リニューアルし、展示などがより考えられるようになったと聞きました。

意を決し、中に入るとまず投下前の街並みと投下後の表現しがたい凄惨な光景の写真、その様子や、爆風などがよくわかるミニチュア模型がありました。

その後進んで行くと自分と同じ年齢の子や、もっと若い子供、高齢者など広い年齢層で被爆体験が記されていました。自分もネットなどで見たことのある展示物がありましたが、実際に見てみるととても直視できるものではなく、見ていただけませんでした。ですが、自分が悲惨さを理解するためには見なければいけないと自分に言い聞かせ、展示を全てまわることができましたが手が震えてしまい、写真、メモを全くとることができませんでした。

しかし、この経験は私にとって命に対する認識を変える大きなきっかけとなりました。



4. 平和記念式典・被爆体験伝承者の方からのお話

平和記念式典に出席する事が出来ない為ホテルでリモート視聴しました。黙とうの瞬間広島が静まり返り、昨日見た遺品などの展示物が脳裏をよぎりました…77年前と考えると実感がわきません。私も手を合わせられたので、心が少し落ち着き、核兵器の危険性を考えることができました。

被爆体験伝承者の方のお話

被爆者の方の話を語り継いでいる方のお話を聞いて、伝えるということの大切が分かりました。

当時被爆された方も高齢化が進んでいる今、語り継いでいくということで当時の状況がより正確に伝わるということを実際に聞いていて感じました。

お話しの中で特に印象的だったのは被爆者の方への差別と助けを求めている人を助けられなかったという罪悪感です。もし自分がその人たちのような事になってしまったらどうになってしまうのかなど色々考えさせられました。

5. 感想

私はこの二日間で普段では学べないような体験をさせていただきました。

戦争、核兵器、争いがいかに無益で恐ろしいものであるかを改めて実感し、1945年8月6日8時15分に落とされた1発の爆弾により罪のない人の死、障害、病気、差別が起こったという事実を当時の物まで見て深く考えられた今回の経験は貴重だと思います。

僕は平和ボケをしていたので、世界で唯一の被爆国に住む者として今一度平和や命について考える機会が与えられた今回の派遣はとても有意義な時間でした。

引率して下さった先生方、関わっていただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。



平和への願い

豊島区立千川中学校 2年 菅野 幹大

1. はじめに

僕は、この広島派遣事業に参加することになり、平和を学び、伝えていくという決意をもって広島派遣に望みました。学校でも平和学習を行っています。

今年は、戦後77年になります。戦争は昔のことではありません。今回広島に行き、貴重な体験や経験したことをこれからは役立てて行きたいです。

2. 広島平和記念式典に参列して

平和記念公園には平和を願い、多くの人々が集まっていました。実際に原爆が落とされた時間に平和記念公園に立ち、よく晴れ、たくさんのセミが鳴いている、77年前の8月6日もこのような何気ない朝だったのだろうと感じました。平和記念式典に参列し、僕には二度と戦争をしてはいけないという人々の平和への思いが伝わってきました。

僕が式典に参加して心に残った言葉は、「被爆者は差別に苦しみ、人生をかけてまで核兵器廃絶を訴え続けるのは、人間らしく死ぬことも、人間らしく生きることも許されない原爆の核兵器使用の現実を、心と体に刻みつけている。」と、「核保有国が取るべき行動は被爆地を訪れ、核兵器を使用した際の結末を直視すべき。」という言葉です。

この2つの言葉から世界の人々に原爆の恐ろしさについてもう一度学んでもらい、そして僕達が訴えて行かなければならないと思いました。

3. 広島平和記念資料館

僕は、平和記念資料館に入って原爆に対してとても恐怖を感じました。

被爆者の方々の体験の話、血が滲んでいるボロボロの服、8時15分で止まっている壊れた時計の展示。生き延びたとしても障害を負ったり、大火傷に苦しんだりしたそうです。家族や友人を失った悲しみに耐え、心身に傷を抱えながら生きていくしかなかった。そんな地獄のような毎日を想像し僕は胸が苦しくなりました。原爆の怖さを実感し、もっとたくさんの人にこの展示を見てもらいたいと思いました。





4. 被爆体験伝承者の講話

被爆体験伝承者の方が被爆者から直接聞いた話をしてくださいました。貴重な話を聞くことができました。

「人数などの数字を重要視して見るのではなく光景を想像して聞いてください。」と言われたことが印象に残りました。

8月6日朝、突然大音響が鳴り響き、後ろを見ると悪魔のようなきのご雲が出来上がっていた。ガラス片が体中に突き刺さっていたり、火傷で皮膚が剥がれ落ちて指先から垂れ下がっていたりする人がたくさんいた。市内そこら中に白骨した遺体があったと言っていました。川には水を欲しがっている人たちがたくさんいる。水を飲ませてあげられなかったことを、今でも悔やんでいたそうです。

僕達は、平和を願う、祈るだけではいけない、自分の心に平和について問いかけて二度とこのような光景を誰も見ないように挑戦し続けていかなければならないと思いました。

5. まとめ

8月5日、6日の2日間で、平和について深く学ぶことができました。原爆を落とされた場所に実際に立ち、式典に参列することや、見学を通して、その日、広島でおきた悲しい出来事を深く感じることができました。

僕は、この2日間で学んだことは、決して忘れてはいけないことだと思います。命を奪う戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、平和の大切さは僕達の世代が必ず未来へ伝えて行かなければならないことだと思いました。

とても貴重な体験をすることができました。ぜひ沢山の人に広島を訪れて平和について考えてもらいたいと思います。

豊島区の平和派遣事業の皆様、このような機会をいただき、ありがとうございました。



広島派遣事業に参加して

豊島区立千川中学校 2年 中谷 克太郎

1. はじめに

今回、広島派遣事業に行けると聞いた時は胸が高鳴りました。しかし、僕は歴史や戦争についてあまり詳しくないので、広島に行ってから他の学校の皆さんについていけるかが心配でした。この為、事前にインターネットを使って様々な事柄について調べてから臨みました。実際に広島に行ってみると、調べた事よりも当時の様子が詳しく、そして生々しく伝わってきました。



2. 大和ミュージアム・てつのくじら館を訪れて

呉市にある「大和ミュージアム」で最初に目に入ってきたのは、戦艦大和の10分の1スケール模型です。ここでは、なぜ日本に海軍ができたのか、なぜ呉市に海軍の鎮守府（ちんじゅふ）ができたのか等、知らないことが事細かに書かれていました。戦闘機や大きな爆弾も展示されていて、これらが実際に使われていたかと思うと恐怖で足がすくみました。

また、てつのくじら館では、機雷という海に仕掛ける爆弾についての説明がありました。

更に、今でも「掃海」と言う機雷を除去する活動が続いている事を知り、驚くと同時に、戦争が遠い昔の話ではないと感じました。





3. 原爆ドーム・平和記念資料館見学と記念式典に参列して

僕はテレビなどの映像でしか原爆ドームを見たことがありませんでしたが、実際に見て「迫力があるなあ。」と思いました。近づくと周辺には多くの瓦礫が散乱し、建物自体は鉄の支柱がむき出しになっていました。原爆の破壊力と悲惨さを静かに訴えていると感じました。

その後、広島平和記念資料館に行きました。ここの特徴は、実際に使われていたものや当時の写真が多く展示されていることです。特に印象に残っている展示物が2つありました。一つは石段に座っていた人の跡が残された写真です。居たはずの人を瞬時に消し去る熱線を持つ原爆は、恐ろしくて忘れられません。もう一つは、被爆者の言葉です。写真の横に「死体と間違われて焼かれてしまうと思うと寝られなかったんだ。」と文章が添えられていました。原爆は人に外傷を負わせるだけでなく、心にも傷を与えたと言う事がよく伝わってきました。

平和記念式典にも参列しました。「本当の強さをもてば、戦争はおこらないはずです。」という平和への誓いにとても共感しています。更に、「今度は、私達の番です。被爆者の声を聞き、思いを想像する事、その思いをたくさんの人に伝えること。」の宣誓通り、僕達に課せられた任務を果たさなければいけないと強く思いました。

4. 被爆体験伝承者によるお話を伺って

「人間らしく死ぬことも、人間らしく生きることもできなかった。」被爆体験をした人から話を聞き、広める活動をされている被爆体験伝承者からのお話で、一番印象に残っている内容です。原爆の投下後、市内にいた35万もの人々は誰一人、何が起きたのか分からなかったそうです。逃げ惑って生き延びても喜ばず、「自分だけが助かった。」と苦しんだそうです。しかし、後に「違う、生かされたのか。」と思い直し、苦しみや悲しみを克服されたと伺いました。被爆された方々の心情までも詳しくお話しして下さいました。

5. 感想

今回の広島訪問で、僕はとても貴重な経験をさせていただきました。これまでは、文章や画面を通して得た知識だけだったのに対し、派遣事業で直接、自分の目で見学し、お話を伺ったことで胸に深く刻まれた事がたくさんあったと実感しています。

そして、原爆だけが悲惨なのではなく、世界中の戦争、紛争、内戦などの争い全てが人々の心と体を傷つけ、後世にまで憎しみや悲しみを残してしまうことを忘れてはならないと思いました。

今回は、このような貴重な機会をいただき、大変勉強になりました。豊島区の平和派遣事業の関係者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

平和への祈りを世界中の人々に

豊島区立明豊中学校 2年 飯田 裕大

1. 広島派遣前の考え方

私は、数年前から戦争について考えることが多く、「はだしのゲン」というアニメを何度も見て、簡単でしたが戦争をしてはいけないなと思っていました。そして、私は広島に行けると決まった瞬間、率直に嬉しかったです。その思いと同時に、多くの人にヒロシマの惨状を伝えることが使命だと感じました。

2. 被爆体験伝承者橘さんのお話を聴いて

私達は、被爆体験伝承者の橘さんを通して、被爆者である細川さんと鈴木さんの体験談を聴きました。

1人目の細川さんは当時17歳で爆心地から1.3kmの場所で被爆しました。道には苦しみ、うめきながら「水を」という声が聞こえたといい、「どうせ死ぬなら水をあげれば」と後悔したそうです。私は想像するだけで、手が震えました。細川さんは、原爆をただただ忘れたかったため、人に伝えることを避けていたそうです。

2人目の鈴木さんは当時16歳で特攻隊の1人として死ぬための訓練をしてたそうです。鈴木さんは原爆が落とされた様子を「宇宙まで届くような大音響」「横へ横へと広がるきのご雲」と表現しています。この言葉を聴き、亡くなった方がどれだけ辛い思いをしたのかを考えさせられました。鈴木さんは物音一つしない所で呆然と、ただうろうろとしていたそうです。時間が経つにつれて、上官の無慈悲に許せないという思いや、自分を責めて苦しんだと言います。最後に橘さんは、「何があっても戦争をしてはいけない。なぜなら、勝敗関わらず悲しむからだ。」と言い「自分が大切だが他の人も大切にすること。自由がある世界が平和と言える。答えのない事に葛藤することで人格やオーラを作る。」と言っていました。私はこの講話を聴き、このような惨状が現実であったことを伝える人が少なくなっているからこそ、一人でも多くの人に伝え、二度とこのような事が起こらないように自分から行動していきたいと思います。

3. 大和ミュージアムや平和記念資料館を見学して

大和ミュージアムでは10分の1サイズの戦艦大和や零式艦上戦闘機六二型を見ました。何も考えずに見ると、「すごい」の一言で終わってしまいますが、その場に自分がいたと考えるとゾッとします。これが戦争の怖さだと感じました。

平和記念資料館では、数多くの遺品や当時の状況が言葉として残されて





いました。その中でも心に残っている言葉は、

「頭髪は焼けちぢれ、顔、腕、背、足のいたるところの火ぶくれが破れ、火傷の皮膚がボロきれのように垂れ下がる。」

この言葉を見たときに、雷が落ちたかのように震えが止まらず、涙もこぼれました。遺品のほとんどには、血がにじんでいて形も大きく変化していました。展示されている全てに原爆の惨状や重みを感じました。

4. 広島平和記念式典に参列して

私は数年前からこの式典を見ていましたが、そのときはテレビ越しだったので今回参列できてとても有意義でした。8時15分、平和の鐘が鳴り響いた時、被爆者達の思いを受け継ぐ事を心の中に誓いました。平和への誓いの中では、「未来は創ることができます。」というフレーズに心を打たれました。

5. 広島派遣全体を通じて学んだこと、感じたこと

私はこの広島派遣で原爆の惨状を明確に知ったことで平和への祈りの思いがより強くなりました。現在、ウクライナ情勢で不安が漂っている中、原爆の惨状を忘れつつあります。だからこそ、私達が伝えていかなければいけないのです。そして、いつまでもこの惨状を知ってもらうことが私達の使命だという考え方に変わりました。いつまでも、平和な世の中が続きますように ...



広島派遣事業を終えて

豊島区立千川中学校 校長 永野 祥夫

1. 「広島派遣事業」を聞いて

6月の区内校長定例会において、「広島派遣事業」の説明があり、まず、本区の平和に対する考えがとても高いと瞬時に感じました。

豊島区非核都市宣言から40周年を記念し、前回の35周年から5年経つ今年、改めて広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式典に本区各中学校代表生徒を出席させていただくことに、中学校長会を代表して感謝申し上げます。

また、本区・総務部の本事業担当者の皆様には、この感染症蔓延拡大の中、きめ細かな行程表や、代表生徒が少しでも、世界で唯一の被爆国であるこの日本の歴史にしっかり向き合えるほどの見学先や被爆体験証言講話などの企画を立てていただきました。この報告書の文章中ではありますが、改めて感謝とともに、お礼申し上げます。

私は、この広島派遣事業の引率「団長」の担当者のお話をいただいた瞬間に、思わず手を上げていました。それは、過去の勤務先にて、他区での教育委員会に勤務していたときに、この事業と同じように各学校からの代表生徒を広島に派遣していて、その事前学習と事後学習を担当していたからです。しかし、肝心の引率者には、名前はなく、実際に広島に行くことができず、実感はありませんでした。

派遣前には、引率する先生方と一緒にグループ研究や当日の見学先ポイントなどの学習を進めていました。派遣前の生徒の表情と、派遣後の表情は、まったく変わっていて、被爆体験者であるかのように、事後の発表をしていました。さらに、全校生徒の前で発表をする代表生徒がおり、その学校（会場）を訪問し、発表を聞いていると、被爆を自分事としてとらえ、様々な場面を想像しながら自身の思いをしっかりアピールするなど、まさに代表生徒としての役目を果たし、地域の方にも発表する企画もしていたほどでした。

本区の代表生徒も、それぞれの学校において、この事業の報告を立派に果たしてくれると確信しています。私の学校では10月の文化祭にて、広島派遣の報告会を実施しました。

2. 派遣中の生徒・派遣団の様子について

そもそも、このコロナ禍、本当に生徒を広島まで連れて行けるのだろうか、と出発前日までその思いがずっと頭の中をよぎっていました。

早朝の出発と、東京駅の混雑を予想して、本区のバスを利用させていただき、東京駅に向かいました。すでに感染症の影響等で、代表生徒16名から2名の生徒が参加できませんでした。

東京駅に着くと、少しずつ生徒同士の会話がはずみ、新幹線内での自己紹介でしたが、区議会議員の皆様の前で立派に自己紹介を進めていました。さすがに4時間の新幹線乗車で、疲れ





ている様子でしたが、広島到着後には、更に1時間ほどかけて、呉港の「大和ミュージアム」と「てつのかじら館」を見学しました。

なれない長時間の移動で、疲れがあるのではと思っていましたが、各校の代表生徒はそれぞれの展示物を前にして熱心にメモをとりながら、感じたことなどを記録していました。

両見学を終えると、再び広島市内にもどり、広島平和記念資料館を見学しました。

暗い資料館の奥に入っていくと、壮絶な写真やその当時の遺品物など、見ているだけで目をそらしたくなる写真やモノばかりの中、代表生徒は、涙を流しながらも、食い入るように説明表示板やその写真を見ていた様子がとても印象に残っています。もう少し詳しい解説を聞く時間の設定があればさらに良かったと思っています。



二日目、記念式典が8時からとあって、起床5時30分、朝食6時、朝食後は、そのまま式典会場に向かいました。政府の感染症拡大防止の観点から、式典参加者の制約を受け、代表生徒の半数の生徒しか出席させられなかったことが、とても切ない出来事でしたが、どこの自治体も同じ条件なので、仕方ないことでした。残りの代表生徒は、ホテル内の大型モニターにしっかり向き合いながら式典に臨んでいたそうです。式典の様子やその状況等については、引率教諭や各校の代表生徒の報告をよくご覧下さい。

式典後は、ホテルにもどり、待機していた生徒とともに、被爆体験講話を1時間ほど聞きました。実際の被爆当時の話を聞いて、この今の平和がいかに尊いものかを実感したはずです。

ホテルを出発すると、昼食の時間となり、総務課担当者の粋な計らいで、市内老舗の「広島焼き」を堪能しました。「広島焼き」は東京だけの表現の様で、現地では、普通の「お好み焼き」とのことです。

その後は、広島駅に到着、お土産購入の時間、かなりの勢いでお土産を購入している生徒が多かったですが、現場のレジスタッフが少なく、私は、集合先に遅参してしまうほどでした。(少し言い訳がましいことですが・・・)

帰りの新幹線、さぞ疲れが出ているのではないかと、生徒の様子を見てみると、なにげにトランプやオセロを楽しんでいる生徒もいました。やはり、今時の子供達なのだと感じました。

東京駅に到着、すでに17時半を過ぎていたこともあり短時間ではありましたが、派遣生徒の中から、2名の代表生徒が、区議会議員の皆様へ、本派遣の報告とそのお礼をさせていただきました。ホーム上ではありましたが、副区長をはじめ、議長・副議長、議員の皆様は、耳をすましながら、しっかり受け止めてくださいました。

3. 最後に

この広島派遣事業を通して、代表生徒（派遣生徒）がこの経験から、各学校でどのような報告を行うかなど、この事業で得たことから始まる諸活動（パフォーマンス）に期待しています。

また、本区の平和事業がこれからも継続していただけることに、本区中学校長会を代表し、改めて感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。



豊島区中学生広島派遣事業の引率をして

豊島区立千川中学校 主幹教諭 小池 恭平

1. はじめに

この豊島区立中学生の派遣の引率は、社会科を専門とする教員として、個人的にかねてからの念願でもあり、引率を担当させてもらえるならば、ぜひともらせていただきたいという気持ちであった。

実際に、引率担当として派遣されることになり、生徒の学びのサポートだけではなく、私自身の学びの貴重な経験ともなるため、多くのことを学び、今後の授業などの教育活動の中で生かしていこうという意識を持って担当した。

2. 広島派遣事業を通して学んだこと

今回の広島派遣事業では、呉市の「大和ミュージアム・てつのくじら館」を見学し、広島市では「原爆ドーム・広島平和記念資料館」の見学、原爆死没者慰霊式典への参列、「被ばく証言伝承者の講話」を聞いた。

社会科教員として、戦争や原爆の、さまざまなことについてはすでに勉強しており、平和記念資料館には10年ほど前に一度見学したこともあった。

しかし、改めて広島を訪れ、リニューアルされた資料館の展示見学や慰霊式への参列、被ばく証言伝承者の方の講話を聞く中で、原爆の惨禍、悲惨さについて、「残す・続ける・受け継ぐ」ことについての大切さや意義について考え、学ぶことができた。

戦後、77年という時間が経過することで、原爆ドームを始めとする、原爆遺物が劣化し失われつつある。また、被ばく者の方々の高齢化も進み、多くが亡くなられてしまっている。これらのことを「残す」ために、平和記念資料館への遺物の寄贈や保存、被ばく者の証言のアーカイブズ、証言を伝承していく取り組みが行われている。

原爆死没者慰霊式典は、戦後間もないころから始まり、現在まで「続ける」ことが行われてきた式典である。数十年に渡り「続ける」ことによって、原爆が使用されたこと、多くの方が犠牲になったことなどの原爆の悲惨さを、各国要人が参列する中で、国内外に発信する役割を果たしてきた。

そのようにして「残す・続ける」ことが行われきたことを「受け継ぐ」ための取り組みも、





さまざまな形で行われている。

平和記念資料館では、展示がリニューアルされ、どのような人が訪れても、自分と重ね合わせることができるよう、さまざまな年代・立場からの被ばく体験が展示されており、原爆の悲惨さについて、「他人事ではなく、自分事として考える」ことができるような展示の工夫がされていると感じた。

被ばく者の方の証言も、被ばく者ではない伝承者の方が直接被ばくされた方に代わって証言を「受け継ぐ」ことをしている。今回の派遣事業で広島を訪れた各校の生徒たちも原爆について「残す、続ける」努力が行われてきた取り組みを見聞きし、「受け継ぐ」ことの担い手の一人になったのではないかと考える。

3. 派遣事業を終えて

最後に、今回の派遣事業の引率を終えて、「残す、続ける、受け継ぐ」ということを考え、学ぶことができたことが一番の成果であったと考える。

世界では未だ終わることのない紛争が続き、新たな紛争が始まってしまっている。このような社会情勢の中、過去に起きたあやまちについて二度と繰り返さないために「残す、続ける、受け継ぐ」ことで、後世に戦争や原爆の惨禍を伝えていく。これが現在に生きる我々、特に歴史を生徒に教える立場の者として大切な使命ではないかとも思う。

私は広島で学んできた「残す・続ける・受け継ぐ」ことについて、生徒への教育活動を通して伝え、戦争、原爆、平和について「受け継ぐ」役割を果たしていきたい。



令和4年度 中学生広島派遣事業の引率を通して

豊島区立千川中学校 養護教諭 阿久津 萌

1. 今回の派遣事業を通して

今回の派遣事業を通して、私が特に印象的だったのは、平和記念式典で述べられた「平和への誓い」の一部分です。

.....

自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。

本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとする事です。

本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。

過去に起こったことを変えることはできません。

しかし、未来は創ることができます。

悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

(「平和への誓い」 一部抜粋)

.....

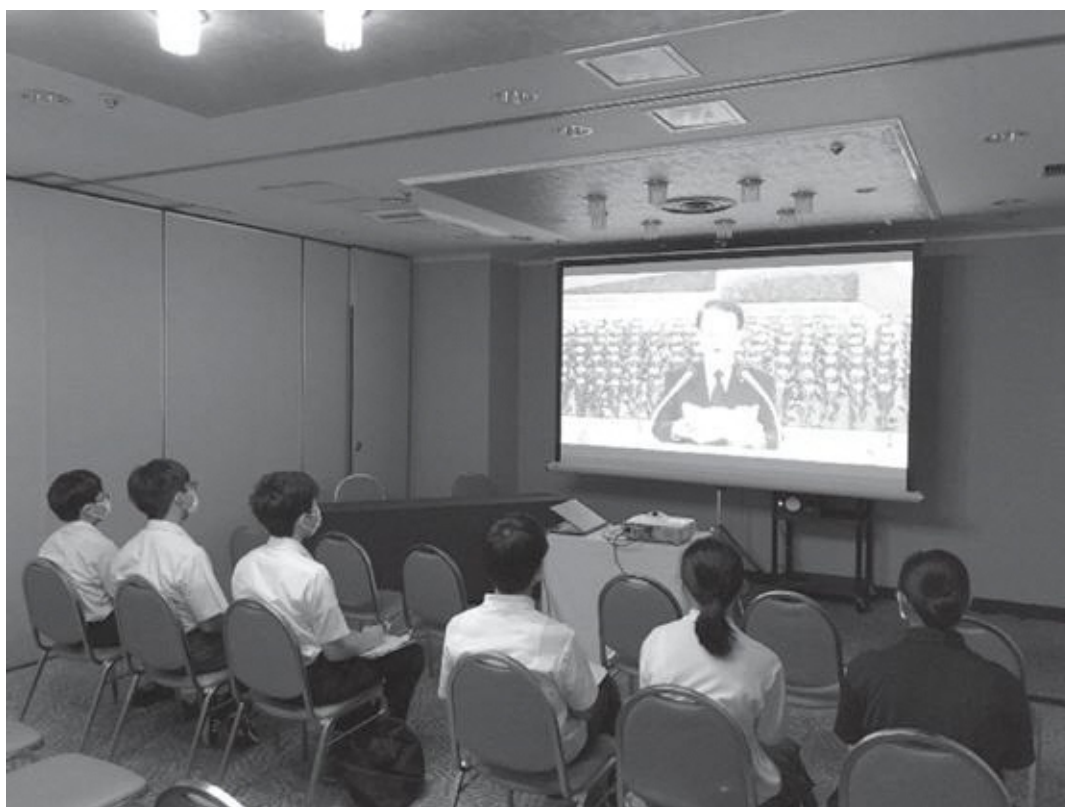
広島平和記念資料館や平和記念式典、被爆体験伝承者の方のお話などを通して、戦争の悲惨さ、非核平和の重要性について理解を深めることができ、貴重な経験をさせていただきました。





どこの見学地に行っても、参加生徒の熱心に聴く姿勢や、知ろうとする姿には、本当に感心をしました。

今回、平和記念式典には、残念ながら全員が参列することは叶わず、参加生徒の半分はホテルにて式典の中継を視聴しました。私はホテルで生徒と一緒に視聴をしましたが、生徒一人ひとりがきっと胸の中に何かを想ったのではないかと、式典を見守る生徒の表情から感じることができました。また、原爆の投下された8時15分には、参加生徒、引率者で、原爆死没者に哀悼の意を表し、平和な世界を祈りながら黙祷を行いました。



2. おわりに

7月中旬頃から新型コロナウイルス感染症の感染者数が急激に増え、このような感染状況の中での実施は心配されることも多かったですが、2日間の行程を無事に終えることができ、本当によかったと思います。

このような貴重な経験をさせていただいた豊島区ならびに関係者の方々に改めて感謝申し上げます。

記録写真集

8月5日 (金)



大和ミュージアム前にて



大和ミュージアム見学



戦艦「大和」(大和ミュージアム提供)



大型資料展示室 (大和ミュージアム提供)



てつのかじら館



てつのかじら館前にて



原爆ドーム前にて



広島平和記念資料館見学

記録写真集

8月6日(土)



広島平和祈念公園①



広島平和祈念公園②



平和記念式典①



平和記念式典②



被ばく体験伝承講和



被ばく体験伝承者橘氏と



東京駅にて解散式①



東京駅にて解散式②

被爆体験伝承者

たちばな みつお
橘 光夫 氏

【プロフィール】

人類は何故、戦争を？何故、殺し合いをするのか？

小学生の頃からの疑問に、平和のため、微力ではあっても何か自分にできることは…の思いから、2005年4月広島平和記念資料館ピースボランティアガイドに。2008、2009年 yes キャンペーン参加、全国自治体首長の「核兵器廃絶」賛同署名を求め各自治体を直接訪問。100超自治体を単独走破。2016年4月被爆体験伝承者に。2016年8月伝承者として始めてピースボートの“ヒバクシャ世界一周証言の航海”プロジェクトに参加・乗船。広島・長崎の被爆者と共に3カ月間ピースボートに乗船世界各地へ。2017年12月 ICAN ノーベル平和賞受賞式、オスロへ、広島、長崎の被爆者と共に参加同行。NGO〈折鶴の平和リレー〉ピースワンの代表を務め、市から譲り受けた千羽鶴の糸を抜き、袋に詰め、広島平和記念資料館等を見学した人に配布する活動に尽力。



広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

令和4年(2022年)8月6日

August 6, 2022

広島市

The City of Hiroshima

式次第

Program

開 式	8 : 00	Opening
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8 : 00	Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式 辞 広島市議会議長	8 : 03	Address Chairperson of the Hiroshima City Council
献 花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来 賓	8 : 08	Dedication of Flowers Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8 : 15	Silent Prayer and Peace Bell
平和宣言 広島市長	8 : 16	Peace Declaration Mayor of Hiroshima
放 鳩		Release of Doves
平和への誓い こども代表	8 : 24	Commitment to Peace Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8 : 29	Addresses Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌	8 : 46	Hiroshima Peace Song
閉 式	8 : 50	Closing

平和宣言

母は私の憧れで、優しく大切に育ててくれました。そう語る、当時、16歳の女性は、母の心尽くしのお弁当を持って家を出たあの日の朝が、最後の別れになるとは、思いもしませんでした。77年前の夏、何の前触れもなく、人類に向けて初めての核兵器が投下され、炸裂したのがあの日の朝です。広島駅付近にいた女性は、凄まじい光と共にドーンという爆風に背中から吹き飛ばされ意識を失いました。意識が戻り、まだ火がくすぶる市内を母を捜してさまよい歩く中で目にしたのは、真っ黒に焦げたおびただしい数の遺体。その中には、立ったままで牛の首にしがみついた黒焦げになった遺体や、潮の満ち引きでぷかぷか移動しながら浮いている遺体もあり、あの日の朝に日常が一変した光景を地獄絵図だったと振り返ります。

ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の命や日常を奪っています。そして、世界中で、核兵器による抑止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増しています。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではないでしょうか。武力によらずに平和を維持する理想を追求することを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危うくすることにほかなりません。過ちをこれ以上繰り返してはなりません。とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、1945年8月6日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにしないでほしいです。

また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、『戦争と平和』で知られるロシアの文豪トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉をかみ締めるべきです。

今年初めに、核兵器保有5か国は「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならない」「NPT（核兵器不拡散条約）の義務を果たしていく」という声明を発表しました。それにもかかわらず、それを着実に履行しようとしなければいか、核兵器を使う可能性を示唆した国があります。なぜなのでしょう。今、核保有国がとるべき行動は、核兵器のない世界を夢物語にすることなく、その実現に向け、国家間に信頼の橋を架け、一步を踏み出すことであるはず。核保有国の為政者は、こうした行動を決意するためにも、是非とも被爆地を訪れ、核兵器を使用した際の結末を直視すべきです。そして、国民の生命と財産を守るためには、核兵器を無くすこと以外に根本的な解決策は見いだせないことを確信していただきたい。とりわけ、来年、ここ広島で開催されるG7サミットに出席する為政者には、このことを強く期待します。

広島は、被爆者の平和への願いを原点に、また、核兵器廃絶に生涯を捧げられた坪井直氏の「ネバーギブアップ」の精神を受け継ぎ、核兵器廃絶の道のりがどんなに険しいとしても、その実現を目指し続けます。

世界で8,200の平和都市のネットワークへと発展した平和首長会議は、今年、第10回総会を広島で開催します。総会では、市民一人一人が「幸せに暮らすためには、戦争や武力紛争がなく、また、生命を危険にさらす社会的な差別がないことが大切である」という思いを共有する市民社会の実現を目指します。その上で、平和を願う加盟都市との連携を強化し、あらゆる暴力を否定する「平和文化」を振興します。平和首長会議は、為政者が核抑止力に依存することなく、対話を通じた外交政策を目指すことを後押しします。

今年6月に開催された核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、ロシアの侵攻がある中、核兵器の脅威を断固として拒否する宣言が行われました。また、核兵器に依存している国がオブザーバー参加する中で、核兵器禁止条約がNPTに貢献し、補完するものであることも強調されました。日本政府には、こうしたことを踏まえ、まずはNPT再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次回の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることを強く求めます。

また、平均年齢が84歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆77周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和4年（2022年）8月6日

広島市長 松 井 一 實

平和への誓い

あなたにとって、大切な人は誰ですか。
 家族、友だち、先生。
 私たちには、大切な人がたくさんいます。
 大切な人と一緒に過ごす。笑い合う。
 そんな当たり前の日常はとても幸せです。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。
 道に転がる死体。
 死体で埋め尽くされた川。
 「水をくれ。」「水をください。」という声。
 大切な人を一瞬で亡くし、当たり前の日常や未来が突然奪われました。

あれから77年経ちました。
 今この瞬間も、日常を奪われている人たちが世界にはいます。
 戦争は、昔のことではないのです。

自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。
 本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、
 相手を理解しようとすることです。
 本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。

過去に起こったことを変えることはできません。
 しかし、未来は創ることができます。
 悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

今度は私たちの番です。
 被爆者の声を聞き、思いを想像すること。
 その思いをたくさんの人に伝えること。
 そして、自分も周りの人も大切に、互いに助け合うこと。

世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います。

令和4年（2022年）8月6日

こども代表

広島市立幟町小学校6年 バルバラ・アレックス

広島市立中島小学校6年 やまさき 山崎 ^{りん} 鈴

Commitment to Peace

August 6, 2022

Who are the important people in your life?
 Family, friends, teachers.
 We have so many people who are precious to us.
 Spending time with people you care about. Laughing together.
 There is so much joy in these ordinary moments that we take for granted.

8:15 am on August 6, 1945.
 Corpses lie in the streets.
 They choke the rivers.
 Voices beg for water, plead for water.
 The people you care about vanish in an instant, and the life you knew, the future you imagined, are suddenly pulled away from you.

It has been 77 years since that day.
 Right now, even in this moment, there are people in the world whose ordinary lives are being taken away.
 War is not something that exists only in the past.

Strength does not mean having the advantage and using power to push your agenda on others.
 True strength lies in recognizing differences, accepting others, and trying to understand them with empathy in your heart.
 With true strength, there will be no wars.

We cannot change what happened in the past.
 We can, however, create the future.
 Accepting their grief, the *hibakusha* stood up and created a peaceful Hiroshima for us.

Now, it's our turn.
 To listen to the voices of the *hibakusha* and imagine how they felt,
 to convey those feelings to as many people as possible,
 to cherish ourselves, those around us, and lend a helping hand to one another.

We solemnly swear to take action for the creation of a future where peace is reflected in the eyes of everyone around the world.

Children's Representatives:
 Barbara Alex (6th grade, Hiroshima City Nobori-cho Elementary School)
 Yamasaki Rin (6th grade, Hiroshima City Nakajima Elementary School)



本誌の編集にあたり、ご協力を賜りました関係者の皆様には、衷心より御礼を申し上げます。

豊島区非核都市宣言 40 周年記念誌

豊島区中学生広島派遣報告書

発行日：令和 5 年 (2023 年) 2 月

発行・編集：豊島区総務部総務課

〒171-8422 東京都豊島区南池袋二丁目 4 5 番 1 号

TEL：03-3981-1111

